俳諧十論衆議拾遺　全

杯七毎

へ 5
2961

門 へ 5
號 2961
冊
早稲田大学図書

俳諧十論発識拾遺

俳諧之道

○

抑も俳諧の道といふは身一ッに虚実の自在より出
の理屈をよくしるにして風雅の理にあそぶ事を
以て論ずる俳諧の実理なるものゝ人にして世を
なつかしみ是を狂言綺語の戯弄なりとして虚実の間に
心をあそばしむるは綺の節を実とする也
たゞ識云道は虚実の間なり実を虚実の自在
にある其郷の万物をあらはすの自在なり風雅の
道理此風を虚なり雅は実なり此の虚をとりて
誠実をもて[illegible]実の虚をとりて能く虚の実をと

俳諧書画精舎[illegible]荻原之彦記
[illegible]堂蔵書

但し此風雅の道理あり無情の理屈にては
説かれし虚実をわけて其の理のを自然不
叶ひて虚実の説をも不弁にあらず假令は此世
於いて己を以て事にあらさる便をわけて世に
如此なく人のうへ誠をも為すに為り其上に
その実は虚なるを知りて其虚の実なる族は
知らるゝ為辯おいて理の中に明也と云ひまて
大辯十論の意は知らる紀録之世情の理屈は
例とする所なるにもあって風雅の道理は広く
天下統一に流行なるを為しめさらしむ
在る事なり

申しさふらふに蕪くる種をつゝ無しもと
花無ふ多きを無所　其年
行前農家に花懐のやうなるを云葉なれ
去すくを国にいて余情あまを無紙して
とせ能なるをさして花の咲き代わ花懐なる
種は年あるにとの花なれは積なれども申おして花の
熟は無なれは無理を流しては其らを無情の
理屈をは知らるゝ其理屈をもなれて風情
の道理に於いてなき人の道理には無之熟の理
屈をも屈せる人の理屈をは和道理にやうにして
真にいひなるとなる事ひなりきて云語なれ

歌のさまあり東花坊作金鉢の式鈔に
出したり
虚実の以ては未だ有る日に定まる絶
対句詩歌人の雑して結ぶの処をいへる虚実の
以ては虚にありて事を虚になして以て因果の
目にみる接授なり定足を語の理論をいへる
より俳の理屈なり以て因をなき人なれは古を
以てまれ日にいふかれ尚以てまれいる日を以
云葉にたとへ人の以て風雅のまことを双に有り
故も詩風雅の余情は以て成りて識て有名の
なきを定めの止なきは行きとなる虚実

○

自在転変の論

世に仏祖には荘老の風ありけると黄白をも云
ぬ人は云ひなり故に荘老の道ぞうや人の己
故を先として聖人の仁義を語るとは無情の
理非をあつかふ虚実の差しきを明らかにする人を
見る故に仏祖は理非をあつかふ人ぞも今日の無
情をなしたまふは虚実の変化をあらはし
形情を無情の和説ぞもあるは実を一字にたる
旨あまりて此実の一法は言ひなるも花あれは未れ
誠の道を以て儒仏老荘の間をつらぬく虚
実和中庸の法ありけらん是より儒仏の

○

大道ハ虚無の先後に家をさしはさむを俳諧ハ
おそれ仲人とするなるへし
要録云俳諧ハ儒仏老荘のこゝろをもて是を
以てそのまなふ所ハ足をもておそれとしつゝその
あれハ他の心を遣れあらんことを無論の所なり
あるなりこゝろ其法をさとるなり　読合せ
要録ニ儒佛老荘の教を探りて其地を書なと
心者の俗をよるなりといへり其中に
まへて萬葉の風雅あり小倉集
ある道や為にをゆつりて記
ことわりや盗人の心あるものなり

○

空をわたる旅人の何かしれぬ俳諧の趣
蘇をとる又其の題をあらはす中に
此の子の為に盗人に逃さる事

法とて法は之儀あり無情の人和ハ五倫の常
法にておりしきハ俳諧の名とさるゝ様しおゐ
風雅の解を盡すなし人よく此之を知る時ハ
万千千重の羅綾を加へるとも蓬一枝のよき
読むれは八跡の葉蒼緑律ゝぬとの一瓢の
飲食のこゝをかへしと世情の変をさとりて
発言に是をあらはしもる俳諧自在の人と
以て称し

衆說云足低語ハ誹名をもて人をいさむるにふ
ふをはして名ありといふものは清宗の意を
俳諧ハ虚實の二ッありけれは虚實ともに利
ありて所に阿ハ言語なりともかくはなりてと体
しるをさる句毎に心得あるへきをも常の人
にも高翁の句をさへくへし又辞しても而已てん
得るよき其ありしてや申すてさるまさるあり高翁の
句に

此をはふかくさるものにて語にふかきて
此高論ある人の間にある中をさいてみて十中
直りのむつまし記實情なりぬくとくに訴まての

ありしきの語を忘れもらし又
第一とをとらの月のまる
第實有爲の如く語や投政布
の熟ひ飄練の語成筆く此虚實共々や
ありしての句は稀なる意其ありしての所絶
してなる誠許敢にくて虚のあやうかんなら
其實の隱ならんにしれ心にや
或云俳諧は物に虚實の論なく風より寫出して
も實餘にも言白さりの雲に遊して虚
實の設あらんにし手筆の四維鍛に水氣一枚の
まひを見よまた八珠の葉の覚にも一瓢の錢の

來ミ統之人まとあり

解曰此一對ハ俳諧の一大事なり身に飾る
者ハ人に飾口に奉る者ハ意に奉るおそれ
儒佛の識者にも「常ニ合ヒ道」といふ事を俳諧
の人は活計なりけり

去りながら東翁の俳諧ハ学を志てこそあれ
とまれかくも俳諧の翔ハ志ある者ならバ俳諧
の人は俳人なる人なり此故に吾翁ハ俳諧に古人
ありといふ事を知らざる門人に向ひて訓
の秘文とせられたり今も東翁清談を
論ずるもの俳諧に道を志す者の為に

俳諧に道を得ざるものハ無
数にて俳諧に古人ありの語ハ東翁ましまさバ
はなむけ花師翁の松系の擬集にて故翁に
此語ある事を志すべし（翁ノ松系集東花坊二十八歳ノ擬干時翁五十一歳）その
集にある翁の餞別

此さゝ波擬きよもすがら一具

是によりて「百まで」ゆかんといふ事もある
東花庵師の留別ある高吟によりて師資
相続のかゝる留別の句は百までゆかんとて
のこらず此学のかゝる事を志すゆへ皆
道を世に志す者のかゝる意をなすにも

故翁の傳にあらす漢意東坡か流の中にあれ
ましくは十論に変のあたし去りるに虚實推
調の姿をえんに見るの其しらる翁の意にいふは
東花坊の作りたる文ありなてはいへるは湖にしき
年の第一なりける翁曰虚にして實なるもの
ありて實にして虚なるもの有り虚にして虚なる
ものは世にあれ用して又稀なり其は虚實推
詞は奥意にして虚實の虚實を忍ぶ深意なり
らまや二十三ノ條にあり姿をえるに至る年建川の法甚
なりふ故翁連歌師山那須にて達むると
秋風の句の五文字の外に文字とは文字をさまく

姿情は先づ後の論文あり是等にそれくはせ
られたる文あり十論衆議ニ出タリ

○此や俳諧の詩歌をさす詩に杜陵あり哥に西行
ありて其の姿情をふくは古にならひあれとの雅言を
俳語に続してゐは例に虚實の自在より俳の論りしを
例のあらそは風雅に至遠路の年なれはなりと
外は詩人哥人達その風流をかまへ虚實あやまりて
哥を作り詩をつくるものは此何よりも上手の名はあ
らん名人の場をさるなまてのよん志たるは名人も上手
ものまうひ其上手と十分のまてふ記名人は一定の
俳に於てふ伴は万物を理に至るくは地をその

詩は変化せらるゝ面とみしき風ならね鬼神も
其歌に涙をこほして花に対し月に泣まする
況や俳諧の卓犖常ならぬ俳諧なるに人の虚誕すへき
きらんや

衆議云言葉にかゝはらす物の姿情趣をのふしてこそ
いふものは今此俳諧なりけるゆへに杜子美西行の詩歌
詠めて正風躰の花操人ならは歳々雅言も俳諧
をと志るゝ風雅にあらす遠路の事なれはなりと
きゝえは雅言の雅なるもいふにおよはぬ俳諧とて人
をもたる宗鑑の事まりしなく人の感あたる風情
あるは俳諧にも能なる安ふし俳諧に蕉門の俳

俳諧は雅俗一様の風流にして学ふに心自然の正
風躰なりけるを知るへし論ならす當世は花車
みもの年頭くふしを俳諧にかゝる種は虚実の
誠となる言語の理屈をもつはら慮をまとはし出すに
やはらかく詠むなる詩は正風躰とかくく来すの只
言なり詠志ふせたるあり尚なる人上ミの俳諧に聖
賢佛祖に於ても花文及び無なるにいへとゝら
なり梅をよみたる人のうたは一眼界を知るにて是
俳なる詞のはな作りして何をもみな自然にして上
手にもうしてあるものゝ下に事ふ作りして何ともなさる
ものなり其當世の名人にも竹乃こなたになりなる

應し句の姿情ハ違くさまにていふ事につゞかれ
此ふしの蕉門の多くは有りけるを以てすまじ
にあらず是或は云杜子美の詩よりは出情は
ふしぎ西行上人の哥一首にも佛は作り出
宮にて何等にも名人の信を致して為し
其是は浦(?)よりにて俳諧の卓犖としてあたへの
氣象にして信の一字を忘れまいぞや

○

此故に吾翁ハ門下に十哲の名は世にあらハれ
この其の徒あれども人にもちいて俳諧をこのしき
眞人に信にあつて偽(?)りの嘘(?)の所は汲んでみえ
武江の仏庵にありし佛頂和尚の禪室に
まいりて禅子一僚の榮に不得俳諧をよりて風雅の
まことを悟示されたるより世間の理屈をよくさとされ風
雅の正理によく捉ひてく
蒙(?)俳云蕉門の俳諧ハ三文字ハ世間相をいふ
川意を虚實ありて顕はれり然るに時宜に於て一
法を教へ不和風羅月の風流俳諧をのこさを
得て百韻の句割のあらましなれば百韻の内
有心付二十句含秋七十句遁れ句十句とを是を
秋文に字秋の所のうちに一ツ自由なる事をもつてし
世情の時宜を細かにすてて足りたる所に俳
諧の無情に時宜の一法をもつてせられたり

蕉中井波の俳諧に

無年と留めるはそんなれ　東女坊

里ありとさらは何毎にの流しぬ　太竹

めれと笑ふに梅の花見れ　翁

前の二章はかはりなれりけれんを示すに

もとりて一巻の大意の見て知らさせん宗まに

投子一機の策は活則とまる事し

有心所は猶句

何と見るかとも頼まなり之

初めて新良を為念ながく

道句は假令は何緒合せきれ上戸なく飲ひ

うしかなりて連歌あるとその縁辞に連歌の

其の気味にかよんとむかひまでなるものにや

○

それも此次の功を論するに儒仏老荘の虚実は未

だ必ず詩歌連歌は理を極めずして国にいをもる

になれば家々にいふてあるをのつからと俳諧を

見るの一助となる事し

愚議云儒佛老荘の虚實は未だ必ずしも詩歌

連歌の理を極めずとは何の君とかいゝあらたむ

その文はいふなれども俳諧は虚実の段をたて

まるなと見る事し猶其論に曰和の和十分の

道理あれ共君父にありきなりにせんや

君父に忠孝をつくすも道理なれバ理に高ぶる
も道理なれど害にならぬハよろしきも虚実に
親しミて風雅の道理なる俳諧を知るべし
とぞ

○たとへバ俳諧の人も都(みやこ)の遊びなきにもあらねど
田舎の秋の癖にまじハりて工商農者のたぐひに
うちかたらひ酒肆娼房のあそびにおぼれバ世界
を賤しむ無理をあらはして向上の一路をわすれ新しき
俳諧なる人を損ふも此道ならねバ人を益も
ならぬ此道ならんか
農議云無不是俳諧の学問所なり無になる

ゆく年頃より吟ずるして虚実に工夫を
所にあるしよきやうや酒肆娼房の遊びよりて八
知らずいたぬ害なく知らぬ損ハ益なし
危ぶからんや是れらハ俳諧の徒然なる頼志
らせ損益の二ツを害に知るべしとぞ

○害にあるハ吾等らたましく人を論すとて俳諧ハ
其後の世のしるに比べる俳諧ハ我家の遺金なり
らんやあるに及び人非道をつくさんやとをさと此
意を論すもよき時は友達なくして行に
あらハいやまちんに思く世の人にまじはるさきハ只
此俳諧のことなれハ足の虚実の媒にして世情の

人和をもつて局之術や此道の繁昌なるべき事なり
かゝる人の実に高慢して若かゝる人の取扱ふ人
はおのれらの金銀を世につひやし物の費をなし
論する志ハ中々人間のあやまち所にて之し
かくて此道の本情なる事を知るべし
花猟会花鶏の本性金言なるに今此傾城ハ
好むもの人こゝろ見分る事を知るべきなりける
諸人のさとり者花鶏の楽みなるべくして好むとお
もふともある事なれどかゝる傾城をひいき致すものを
第一に花鶏のわかの道ハ好むよし諸芸の道なれ
ども唄三絃とれも諸芸にあるなしを好む也

花鶏の楽になる傾城をも人皆とて不好事もとめ物
の好むとも論する好きの好むにして中々人々のあ
さむき事なる者を志らん傾城の道ハ唐てんの好み
るわかの世情を好て是用をなすべきを知るべし
也とぞ

次女情ノ論

○そもそも傾城の風姿風情とは古今の名を論ずるに
なり古風を専に其情を好むく古今の古の姿をとる也
今様を用て其姿をとらく意味の日の情致会ふ故に
古き情のよみして今を專とする論を知るべし　抑
情あるハ姿なりけんや姿ハ情の外なる姿あれども

生類ありとあらゆるもの誰か自然のあやしさをもつ
さゝんとする姿のあまのうへを論して其上の風を新しきを
知らぬは無するなり　未男未女まて姿情の論にも及
ぶべからん

無識云　物に情あらば姿なからんや　其情を述る
時は自然に姿有べし　情の外に姿なし　情は
なからんと生るもの志なし　みなをもつて　情は姿
情の前後をいへば　情の辞を述るに　天地人の
三才より君臣父子の忠孝仁義の本を
述ぶれして儒仏に文章の姿をもつて　世に古風の
詩歌の如く姿情を無くして新古の差なからん

明なる此一段は十論の中にも更に要なり是を云
誰もよく姿をとして　なるとは云へ　さればこそ是にて
外の余情に其所の有ひとつ此所にありて又
此を入ねは屈んるに　なきよりも　さやうに多かれ
長短のへ有なる　扱かひもぎれんは　なんぢは紀貫
之なからにもあらで　其ことならずは姿情有るの証
なくて其かぎりの姿をもあるべし　あるに集む
あるへし

ふとばしさる所に一雑

眼前の姿にして其外にあるは姿をも又は姿と
姿の見ゆる人は不自然の姿に常なる人の自然にて

されば人も又其しらべに應じて是等を節の妙
情なからんの縁語なき物をはたて人を感ぜしめ
又あるべからず
義入ていふ事ぬ深き縁をかく見えたり
此ゐやうつくしき風景に縁語の上ねばなき
そしのひしを人の心をかうぶりてある古風
まで物の門五節内に贈る志しあやめの如き情の
みにて深くも切て離なを緑見んとする所
此所を言語のまの深きもとてある所つる所へ
ことをよくあらぬ此さ風深き風情の論なき
時なればさきにとまりをや風深き風情の縁所なる

なるかなるに深き情のしら緑もあるのまに置にまか
或云此段の句に
折る手にはまだ葉もみぬ蓮の花
此句の何と深きか只蓮の色をあつめてなき便なき
にてはなるゝ事なかるべからん
折にはまだ葉もあはぬ蓮の色
とあるを一字をのぞいて思人の蓮池に
其をおほくそをのこしたるにとふべからん又
時を見つるにぺてよる所にまかれ那に餘
咲てさくらふんもちて櫻の縁
二。章は無情の縁を諫めたる節章の縁は様々に

して一句みるの姿なり語の格は又情をもとに
して姿をもとゝすされハ文章ハ中の七
文字縮めてみるにしといふハ句を専らとす能乃
余情をいはん語を見るものなりてそを去る格を
するにて語直にして尽さんには見るに向へる余情
をあらん是までの句をも人に譲るを先としてそのすべて
節を語に修業人姿情の其後の心付まて成り
或云もり来る其師説くに俳の聯に
世の中見る語をなりてハ首尾をり
是亦深姿情の文語の自然なる語を見るなり
雑の句にして師傳あり是の先ハ姿情の第一後

よりて語の理屈をもすみそ見ハ何也能此句の
五文字格に書き加へりて雑の辞として左に於
ゆあかきり

○

佛經に多く頌あれハ儒書にも亦三百あらんや宜
頌文章の姿をそれハ何也
前緒ふ文章の姿を修辞の立派にして其の
格下象形の姿といひ言語の字一句の姿二句の
姿本の本あるを此文章の姿をもて見るに爲能
情あり爲辯なれハ誹諧の姿をもちる也に對く
無語揚く是家をもふくるあり其是家語
あふもあり道の立派なりてそれに文章の姿語

気分處し

○寓言俳諧の附合は論せす常に前句に深く
思ひ入前句の情に叶ふへきに及はす他所に其翁は
年を以て俳諧は功者なれは自然と俳諧を
思ひ知られし事に在年月を心安き情の移りにまかせ
所て詩の心を明らかに情の感かれ無ける也
衆議云家師のいへる今の俳諧は往年の事
ありしかは只ならぬ人のまねを人の心さへ入るへき
前句にあたりて出つるを人とおもへは先人の頃の
情の句になりて初心の者のまねをする如し
去りの俳諧とはかなれと其方の句の意を知れ

年に此事ありと考ふる人の心持の句なれは今そ
寓言の附合は俳諧の目当ありてそれを変へる
気分處しく目に見ゆる事を身にあてる心を持て候
今を
為助に目の前の軍記をしやへる
十人なしに居る事　候
金屏に家師の言ふ事を述へ
其附合の三句を年に出し時を家師は為助の付合
しけ様に家の内心を向かへる時を未熟の人は
此の家の三句目を家師の事名の心を持て
気を此の事に年月の明さきにより人をもとむる

ぞありしとぞ
或云三句目の事は是又古今集の序にも見
られたり是常毎にありて四方の所言を
三句目の所々をいはしむ雑体にも
三句目に至りては中なる故も古人の句に所言を
あしらふや日頃より発句に十人発句の脇句
の所言は勘助にて付の無経の用なり三句目
所意を付る脇句に師の内證を以てるまで
に所意は何しかぶる様なるをし句編者を
見発句へば脇発句にて句作り也さればその句は
発句の外は次第をとくへりしたる作りは発句の

内は情緒様に語句のうちをうまれて作は
情にて心あるは解にてぞ句作りは用也故に
往々は発句のうちにしてたる作りの大なく所為
作句三つるは附の余情を作して句のうちを所に見
法に附合の論ありて時の付るにて其は師は
辞あり其意中なるは躰重にするよしきは
或云ありて取沙諸の新律なる大様なる
の趣錦に

花とちりゆく所以

垣隣て山より外に

素今様に猿年午　鶯

此之句は誹諧に茶会をする句にしてく句作に
千前の新茶ハ古き友なるにより是を二句の間は
ものなりけらんにあるべし
茶会 能々 経ル其 加へ里
又師は法則ありて誹諧に句作りの大きに
取りて人目稀なる山里に其加へ里の人を
聞ぶしく顔の茶会をする所を好く好きなる
深く能は為されき事を好みとも為る為り
或る此所人合を知りに千岩をおりる此事の外
外にもする事を好みて野人もいんにふ之る月
の其りわりて人も人倫の付誹也ハいきんろ

然るに近頃は発句と句作りの辞用ゆりおもの句は
なりなるを誹諧の付りしてゐぬ事をもの句に
しるこころをを論也となく人倫の外結にはなき
き但かにの心得違ひより付誹の句は人倫
なきゆくかへ句中に人ありなるもいへるにあらず
しみ法則の害なり自ら払ふのつとく人倫
情は所人合の目に作りに中為りゆるなく其果は昔は
誹諧のつかしいひ発句のあくまでに芭蕉翁より来の
付誹を嫌ふとする為かし次にもし又発句と
以く句作りとりて辞用は是ならるまいなりては
ただなる法則そこのなる事をしるべし

或云稽古集なり

はなしにつけたる歌とて
浮舟なくてこそ皆小町なり
此所今まで其の稽古場に深草のかよひ
歌句読まれし程作者へのとし小町は
前の歌句よりも句作り結果の一字にて
甚だよろしからず今なりとも此所今にては
歌師の口よりありて読句にも句作りにも
道理と理屈との境ありて是見は二句の間
に余情の有無なりて詳にも読耳にて見立
有しとぞ

○はなし言語の姿といふもの此の人もある道
にも程ふ事しともふ時も有神もまた前を
知ること有ふ者しての時は斤兩をぬきさく
様銭まで数足銭も金の姿といふものは何ふく
なき事語の言葉の也然も一字一點より所
今の姿をかへりゆけは是を深めて有なりし流行は
いふ也も古人もいふ変ぬる事きや（中略温故知新ノ言又十論衆議二出タリ）
以後や此所の流行師も姿情まで新古の
ありけり新古は言語の流行をゆへ
なりとむりし其の言葉に儒佛神道流あり今
其の語は詩歌連誹其流は俳々言語

媒ともなり新古の繼ともなる處理也
虚實は象物の姿を以て言語の姿との二つには
別るなり文為無おもひいたらぬ也故に識
やうにて雅語を翫ぶ時は古風の繼にも至るを
見えざる情を今くなるさまに似せたる物に見ゆ
し記實情詠歌の中に含みたる風雅の
實情をあらはさずなりし替ありし為あれば
人の辞なく
作り本の虚實を練ある是何時南
をあらしめば能語に全く實情の風練にて
姿情に雅俗の品ある事知るべし後より

是何しるしの風姿なりとは所論して見
の事一説なり
或は象物の上なりとは語の姿にあり言語
姿は象物の姿をあらはすとは後今を
示し初の時の時
以て後の時の時
古章に示し是は象なるより續りおこす
鳥居の意なりとは後今を求め思ふ
相以て初の國をきわめ感しおこし給
是より深くおもへ感し人の所
今にも詠は真にして何時ならず時なる

殊に哉是天象に於ての月の晴陰にしも外
甚切ならんや時至として考へられ今の自然
なる気象に於て姿情是新古論是の何れたる
新古是言語の上の淡き事有るべき事を以て大意を
知るべし也

跋

蕉新雑の画一巻に十論及衆議は月次
及会の料として評叟及判読を乞ふ者の
若干及び料は初にあれは此に記す所
この中より孫々に撰びて先に十論衆
論集世にありしは今の人迄も余すところ稽
なし及び寄せし説家密猶に至つて尚議し
道及論姿情の論及二篇より拾遺し
完了小冊となりして年々是今の流堂の
論語にある世の時々にして止事試みられ
まるで判定なり衆議是評叟及他事

能為家の為に後学の為にもんと
思ふ人早授あるへきもの也

遊字菴
書写

安永二癸巳年三月中旬

俳諧書三酉精舎主荻原乙彦記

須磨在家永正年間中書写
其をも自筆模欽の窓下にて
書写之畢

梅久舎

大日[illegible]

[illegible]圖

[illegible]全

玄為大円圓解

以小圣三段為大圣解